月水奇縁巻之四目録

忠臣促駕歸鎌倉
貞婦典身赴岐岨
陷仇家玉琴死節
過客店倭文感操

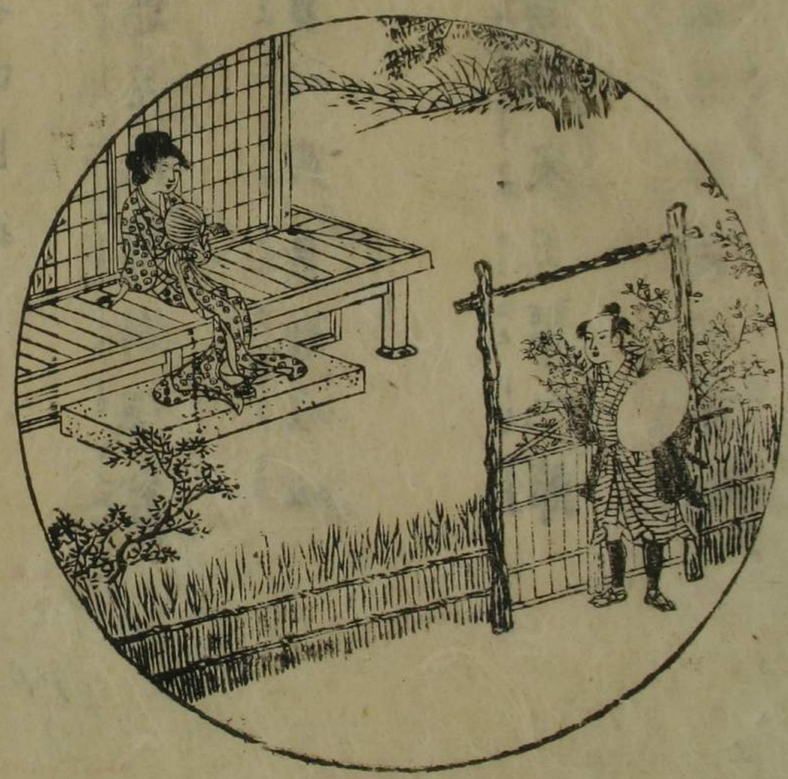
第七回

第八回

東京帝國大學圖書
於 194 2

第四篇
信州　岐岨山房

一声信鳴繋
夢魂忽侍行
宮列柴門夜
来座涙銷紅
粉徒遣菊郎
問路人



月氷奇縁巻之四

東都　曲亭馬琴著編

第七回

忠臣促駕歸鎌倉
貞婦典身赴岐岨

是時玉琴は父母の溺死するをみてしく。愁傷さらに遣かたなく。
共にこの河の滓とあらんと。汀渚の上に走よるを。倭文忙しく抱れ
ごめ。この物に粗ふ。父母の顧命を伺とろ。少刻しころを結て
えづから出掌せよといふ。脇手夫人も又練ゆるく。若が父母已に恩愛
節義の為に死せ。さきに子をおりふのふりはあらずや。さしも平昔は
爽利なく。義理をもよく諭得し身の。なかどうく新愚なる只なく性
命を全しくる。父母の志をむれしくもべからずと宣へば。玉琴君命

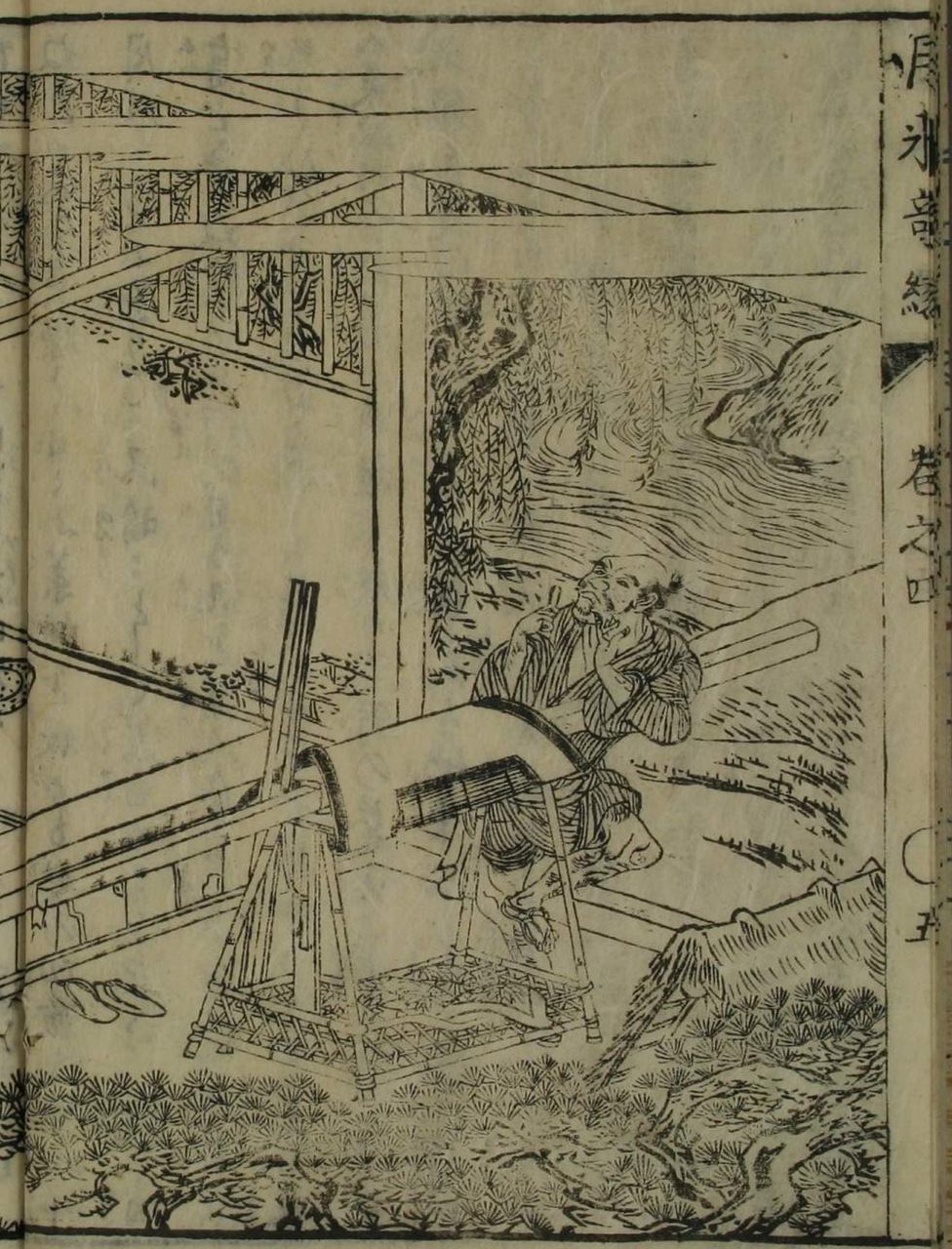
の至れは固辞がすく。志ぢらくその死をとゞまりけり。倭文又いへらく。
你と吾とは元讐敵なれど。你の父廿年艱育の恩ありて既に論
するに死を以て。且継母の顧命もつとも重し。いかで潘楊の好を破
らん。只祿がふところはいかに石見太郎を討て。先考の靈に向人
のこゝ志かはあれど今仇人の所在を志らず。特に夫人邊邑に零落
志ぬへぞ。身を放にしたる仇を探索がたし。他日君家の存亡を
定るのち志れを撃ともおそうくぞと以べども。恨らくは二十余年
の星霜を經くく石見が生死を志らず。加え渠が相貌を視ことなれば
なれば面前志れと會するとも何を以かまがすとせん。よし
遮莫運を皇天にまかせ夫人世に出ぬのちまたく仇人の仕事
を行べしと教諭ければ。孟琴良人の志を嘆くてしかるを心を安

くし。漸漸をとゞめける。この時夜已にあけ。旭日宮嶢に昇て丹
景白雪に映じ。紅輝晃々として満山醉るがごとく。十分の好氣に
倭文忽地さらづ起て云前夜上市の危難より只管雪中を奏乞し
て夫人いとゞ罷病ぬいん自家の事によりて君を苦めなるはふ敬あり
ふ君なり。すゝ云田にうつるべしと。夫妻夫人を扶掖てく立ゆらんとて
ゆくところは只見一群の人馬川上を望てく馳来るこは歡か身方か
と疑つゝ。稍間ちかくなるまゝに眼を定めてゐるこれを視れば。一個の
氏夫身には鬼褐の縵襟榻の袴褶を裝束し。腰に金造の両刀
を跨て馬を先に立て。士卒四五十人を將てくまりしが。夫
人の川上に立ぬるを見てく馬より飛下。されたち逕降てくいへら
く。小人は中村兵衛重頼と名告て。植杉武部少輔房顕の老

臣たり。却も憲忠相公滅亡のち。管領成氏その宋地を没収
志ゆゑに鶴岡應神廟の神士十紙の願状と十領の鉄衣を進る。成
氏これをみんぬへば嘉吉三年より今享徳元年に至りて凡十年。
憲忠毎年太神に請ゆゑところの願文なりその畧に云。
伏請属関東無事教管領成氏武運長
久壽命延永偏仰神明衛護仍獻甲冑
一具云云
成氏これを読てすぐめくその誠忠を感じゆゑ。忽地讒言を絃
じて忠臣をうしなむしことを後悔ありて。憲忠の舎弟式部少
輔房顕を鎌倉の執権と定め。宋地舊のごとく復与ゆゑ。さて
をはてゆゑ蟄懐一時に起らけるゆゑ宋達むかしに歸さしめ。よりて

房顕の命を奉。君の所生を部索まねらまるにこの地に潜
ゆゑと雖迯ならんゆゑ来れりと。備細説了て房顕の書簡
を進ぜば。夫人これをよみてたにふろこむ厚く重軽を賞
ゆゑ。倭文玉琴歓喜にたへず。蟠龍の天に升さらしして遠く
鎌倉に送行ならんといふ。夫人のこゝろいく。若曹鎌倉没落の
日よりこゝろをたまけて艱難を其中し誠ゆゑさらに他人にすぐ
らず。今こゝろに関東にかへるにおよびてハ房顕に執しきる禄を
あたへその勲功をあらはしべきれども倭文は天を戴ざる仇あ
つ。又玉琴は父母新に没して汎瀾いまだ乾ず。さらをめくに従
行志むるに忍ず。只速に仇を復てふまゝむかへり仕よ。こゝろに吏
妻はゆゑに洗塵て再會をまつぞと宣へば夫妻はあまりの悉さ

に。頻に涙にむせびけり。かくて重新准備れ大轎に夫人をしせまゐらせ士卒前驅後従しち、既に鎌倉にかへりぬべ。倭文玉琴四五里おくりなり。その夜六田へかへりけるが。今年も已にくれて享徳二年となりぬ。あらたまの春立かへりて孤霞峯峦に聳れ。怪風剪々として柳條を動し。霙雨滿々として殘雪を銷す。梅開ては年れ新なるを志り。鶯啼ては日の朗なるをおぼふ。朝に愁を抱ては花に坐してもおろかを慰がたく夕に恨を含ては月に對してもおもひを遣がたし。玉琴が父母の中陰だにをわらば。速に家を立去て仇人を探索べしと仲春のころまでは仏會追薦にいとなくて。そもそも弥生になりぬ。まづ東國に赴べしと已に行装をそのへんとするに。そうらぞも倭文眼疾を患て幸延に及ぬれば。大に焦燥て日々に菓剤を服ども些の功驗もなし。卯月れたゞ兎に至りては只暗々として黒白もいとゝがたく。終に青盲となりぬ。かくては何の日か仇を復んとし。窮志を遂ることなくは生くかひなし。自殺せべしと愁悶れば。玉琴いとゞなしとて。或は菜摘村の花籠に祈願し。或は吉野の花王に歩をそこでいる。只顧良人の眼疾平愈を禱るわる他事なし。既に酷暑時にいたりて間室熱るがごとく。倭文数日の愼熱に蘊結て餘病を生じ。二三日起あらざ。湯をもらく沸を止るごとく。搗て加えし疾病に。玉琴こはいかにせんと愁悲ところに。近隣に人の媒妁して活業とする老婆ありてをしへて云。平城に足立貌景といふ醫師あり。この人今の世の猫鴨光仏にして治療を施めの活ぎと



いふことなし。老婆幸一面の識あれば行て迎まゐらべしといふ。玉琴
大によろこび。彼虔婆に就て貂系に療治を請。次の日貂景
まゐり。倭文が容体を診ていへらく。夫眼疾に外感あり内瘴あり。
外感は治しやすく内瘴は治しがたし。不佞倩足下は病症を考
に病根最ふかく。よく草根木皮のおよぶところにあらず。志ハ是ども
水母の眼なれも蝦をもて眼とす。これを治せんと雖にはあらんど。
只一種の某物ありて得ばなれのミ。倭文夫妻声をむとしくして
いへらく。得ばなれ某種とは何ぞや。貂系云白毛猕猴の心なり。是
を主某とし。附某に合せて服なれば立地に愈つべし。倭文これ
ゆよろこびていへらく。小人去年上市を過て猶師の家に白毛猕
猴あるをみたり。是世間亦曾有の物にして主人これを覚ることと

児のごとし。もしこれを得ば病疴をもつに治すべしや。貂系既にて
云これをぞに得ば一旬許にして愈べし。只おそらくは彼猴夫をしこ
て与ざるべしといひて帰れり。夫妻様を促てこのことを商議するに
忽地虔婆まゐりて貂景国の仙とかのまゐりしと問ふ。玉琴医師は
言をもて仔細に説話ば老婆いへらく。上市はこゝより遠からず。これ
まづ彼處に至てこの事を計るべしと托しく去けるが。曛黄に
ゆりまゐらいへらく。老婆蘇張が辯をもて説ども渠敢肯ず。
もし五十金を得ばこれを售べしといへり。可歎かな寒家にいかで
五十塊の黄金あらん。只黄なるものは田園の菜花圓をのは簷下
の塩豉のミ。夫妻よく心量志あるといひもてゝ走去けり。倭文大に
望をうしなむていへらくこれ今世の生計なく。盤纏の尚存るは

過七の布施と病中れ雑費に用出して今ハ朝に爨ども夕の糧なりとなればいろにぞ五十金をとるのへ得ん。良菜面前にありながら得ざるし。彼六度経に説ところれ大亀の妻猕猴の心を食んとせしに一般。労してさらに功なれなりと太息て止ず。玉琴愁うすいつらく。丈夫なぞらくかく方便なれことをのまゝにぞや。木衕衕とハいふ花街程とかりらぬときけば身を煙花の婢となしても金をばとるのふべし。慙に敗意て疾病を増しえなふ。倭文稍沉吟していつらく。大丈夫その婦を花街に陷。羞をうけしむること豈本意なるんや。且継母の顧命なれ耳底にとゞまれば。体を放行に忍ず。しかしとも黄金とるのはざれば病愈ず。病愈ざれハ宿志をとげがし。たせん右せんと首鼠両端に持してさらに決せざるを。玉琴再三

請て典身に一決し。明日虔婆を招れてこの事を商議しけん。ぞらその信をまつところに詰朝老婆前門より賑給として入来ていつらく。夫妻僥倖ゝゝ老婆疇昔花街に行人とせしに一個れ行客ありて令正を身價百金に養人とのまゝにこの財主を岐阻馬籠の豪家にして近曾大和の山水を拝読しなふ。縁ありてる令正の花籠明神に焼香しなひし時闕窺なひ。りし他の婢妾となるべれ人ならば妾にせんとゝ。しなりち人をもつて老婆にこのことを商議させなふ。是鬼を狩て虎を獲の僥倖なり。この財主元行客のことにしあれば。明日故郷にかへりなふ。弥せんとならば轎子をもつてむかふべし。りし又行なれどいまゝ事に回報せんと約しおれぬ。おりふにむなしく苦海に墮落して。昨ハ平族を

俳ひ。今は源姓と睦ふ人より。そるうに蓋たる幸福なるんといふ。
玉琴はそのあらゝ良人の為に黄金をとらのへんとせりふのゝなる
ゝば別に忘恵を用ゐるにおよそれば。さるかち紛んことを紛し
けるゝば。老婆よろこぶべく裳を褰。又忙しく走去けるが少選
ありて轎夫に一挺の轎を擡せ。紛客の従僕を伴来て倭文
夫妻に引合せけるゝば。かの僕一紙の身契をとり出し。續少せ
て倭文が印信を歎せ。身價一百金を遍与ける。さるに於てす
玉琴辞別んとしてる時にうるに忍ぶ。涙を潜然と落し
ていふく。こゝが身を賣ざるゝば病を治がたく。病を治せんとし
てこの身を賣ば。又看疾するものなし。日光ゆぶしこゝ絲ど
野干玉の目さへ見えぬを隻身となりて。わし疾愈をなくば。

終に仇にやのぞまるゝん。是渇を止んとして鴆を飲に異ならば
といひつゝも轉倒声をそなちて異けるゝば。老婆慌しく扶起て
いふく。おろぼそれ事なる宮そ。黄金だにあまりあらば人を傭ても
幸足なん。老婆も又をりく来訪ずしといふ。彼僕も又慰ふ
いふく。小人が主人は信陽第一の豪家なりしよく仕て寵遇
を得ぬらば。豈祇この百金のゝならんや。さらに解分れ恵あれ
だしそやし泣をとゞ免て轎に乗ぬへとせむ。倭文涙をとゞ
めて云。やよ玉琴我們夫妻前世の仇業あしけるゝばこそかく
百折千磨をうくれるゝ。わし分鏡のちぎり竭ぎれ。夫妻完聚
ともあるべし。只顧こゝがことを愼熱く性命を傷をなられ。こゝを
病だに愈ば紛て會ずれぞ。玉琴いよ泣ていふく。こゝにかの

地に至りなば。そのかゝ郷音をいさしてべし。只日夜立屋して再會を俟待るといひつゝ。壁樹裏より敗し梳具匣をとりて出して。髪を髻を將髪。玉琴今已に村落中に埋まく。更に粧粉を施ずといへども。性格たる國色は。野花編に目に艶く。村酒人を醉しむるがごとし。夫妻恋憐として夜は夜るに忍ざれば。老婆玉琴を引ゐるなり。たまけく轎に扛のせる。倭文を得いひのこせしことをあまとして探つゝ風歩して立出る。に悞て前椽を踏てづし。たちまち撲地仆れば。玉琴おどろ紀て走出んとするを從僕これを押とゞめ。轎簾を撲裡とおろせば。轎裡に一声噫と呉をも覺ず。遂に轎を擡出し。足に信て就去けり。玉明君が胡地に適し。輔朋が妻の宮裡に摘まし

も紀ぞあらめとやまとける。彼虔婆は五七両の辛苦殘を得て織に得つれたりとしたるぞぬ。所謂張公酒を喫して蘇公酔の類なるべし。

第八回

陷仇家玉琴死節
過客店倭文感操

紀て玉琴は轎裡に扛ふれ只覺たるが。忽地一軒の客店に至れば。さらにて轎よりおろし。彼僕玉琴を引て紀客れまに出。玉琴既を奉てその人を視に。年紀可六旬にして。眉白く。髯長く。相貌總て凶悪なり。弦波麻のかく織なる綢布の涼衫に辮帯を絞ぶ。坐右にて糸鞋の腰刀いかめしげに螺鈿の刀架に挂たりかの人玉琴をえて大にしたるべ。近く招紀させていへるく。おのれ吉蘇れ深山辺には住ど。むかしは常に都にも交加て情のまちも志れるの紀

と。いとあめげにいふ玉琴は何といふべし云さへなて。淺隈の山のあさぬし
れまゝ。更科川のさらくに。思はぬ人に思ふれ。岐岨挂橋ならずしつ
しる。菅の曠野に露よりも涙は袖にしげりける。彼人この光景をみ
て。心の中に憤といへども。男女の間は威をもてく挑がたれば。只緩女にふ
ちらふべしと。玉琴を携て伝渡へぞ。偽ける日を経て馬籠にあり。
その家をみれば。大厦甍を連閨閫棟を合せたり。奴僕十人ばかりいで
迓て主人の展陶を賀して。玉琴はかゝる田舎に似げなれ主人の活業
何をかしるぞと疑ひまどむて心いよく安からず。それより四五日をへつゝ
主人玉琴に調話ていへらく。これ頃你が為に万方ところ謁と以へ
ども。何の恨ありてか彩活ところしえいさるぞや。既に若干に黄金を
ハ費ながら。多用反目にしてすゝかる。縦木僵壊菩薩なりこも

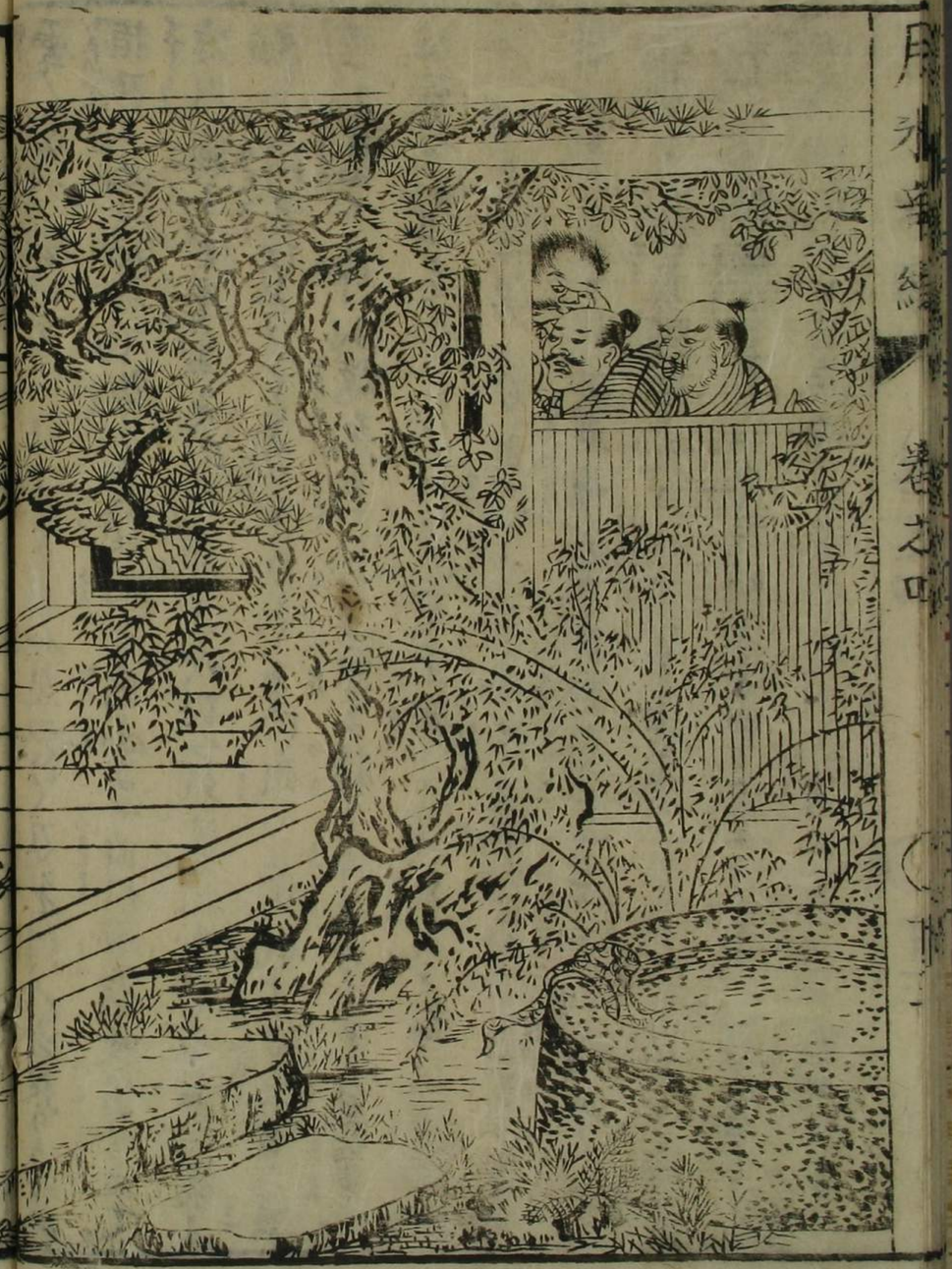
いかで些の情なからん。汝ぞかゝらくに思量せよといふ。玉琴これを笑
ていへらく。こゝ身いくその黄金に換たれば。家公のところを固辞と
にはあらまどいかにせんとしはまて更あり。今止てとゝまして身を他に
はかせられども。心は他にあらせることなし。女子は二庭を踐ざるとかや。
田苅麻かり松木樵ることもいとはじ。その時のことでもなしまへらしと更に
從べ紀色なりもければ。主人ますまく憤ながら。漸怒を蔽してお
へらく渠いかに操を成るとも恩をもてくとゝを挑び終に志を移
じてはがこころに随べしとそのちゝ衣服器物のたぐひ總て婦女
子の私ごとにあらずとも。玉琴さらによろこべる色なく。まにぐ
にとらで只管倭文がとのこおりむ粧ける。一日主人玉琴に問く。汝
鏡を見せるか。玉琴いへらく。鏡は且開れ具にして女のかゝるべ

たゞしなき持つ死のものあり。親がこれを愛ざらん。主人ますかゞら一面の鏡をとり出して云。是は魏の武帝の菱花鏡にも擬れり。これ主を秘蔵せるとなりしといへども今汝に贈りし彼鏡を与ければ玉琴手にとりてこれを見るに背面に蘭菊の模様を鐫て玄丘の両字ありければはじめて完示として此鏡に銘ありやと問。主人いふやう。これを玄丘と号て其徳精鬼を錯銷するあり。玉琴云是るは家公の名を石見太郎といはざるか。主人この言を聞て手をへぞ手すりそる扇をとり落して云。汝何としてそれを名をしれる。玉琴已に主人の舊名を喜てされば忽地柳眉を竪立星眼を睜開。稍久しく瞪視て云。汝は是ぞ是丈人は仇人あり。汝昔江州志賀におひて丈人永原左近を殺害し。

軍須財数万金とこの宝鏡を奪去りしと母親臨終に語給へり。妾既に汝が面影をおぼえつ。二親も非命に死たまひしは今こゝに来ると盲亀の浮木に遇優曇華の花を見ることし。只その身翅なくて良人に告去らせがたきをうらむと歎きて罵る。石見冷笑て云。汝蚊蚋の山を負んとす。ひとしく心を攪ども憶を閉して已むを従ひ生涯歓楽を極よ。玉琴いよゝ怒て云。是れ過て究家の婢となれどもさいはひに身を穢さず。いかでか共に天を戴んやといひつゝ鏡を抱て外面に走去んとするを石見太郎忙しく遮とゞめ。汝いかに罔とも大和まではへ百里の山河を隔たり。これ恩をしらぬ養ひし汝却て仇と罵る。これ鋭刃を銳として莫邪を研ともるにおなじ。強て去らんとならば席に繋ても止ざ

こころを慰べしと責ての時玉琴は隙をうかがひて逃去んと
せしむければ其のちは一言も問ふ事も及ぜ頻に走去んとする
を猜し石見まづ手中の鏡を復んとすれば玉琴遁さ
じとあらそひしが遂に力敵しがたきを志りて彼明鏡をうち
さしあげ庭の井欄へ投入たり石見勃然として大に怒たちまち
玉琴が髻を掴て膝下に引布眼を瞋らしてつつかく長舌
の愚婦などて彩は強顔風は花を散さるゝこそ。花衰て
風にむかふ。ことまづその舌を断ざんばいかにぞこの熱腸を冷
べきと。明見ゝたる腰刀を引拔玉琴を引起してその刃を
面前に衝附て云汝いかく従ずしきや。玉琴雙手をかくその
刃を掴て云生て仇を復ことあたはず死して鬼となりて怨成

雲ん。その言いまだ訪らざるに石見怒て刀を引ば玉琴が十の
指刃に志さがむて雅ゝと墮時に前山に一曲れ山歌牧笛笑えて。
涼風颯ゝと香にその曲節を吹おくれ。石見玉琴が雙手血に
そゝて悶苦むをつんく刀をかくその顔を衝動して云雖ハ真
雄を慕て野に焼死鳥は口の悪に憎る汝指なくてみ海虫ん
とするやかし走んとあらばその足を刖べし。又罵人とあらばその舌
を断べしといひて刀を横にして口中に刺つらぬかんとするを玉
琴口をかゝ刀尖を聴嚙れば鮮血口中より流出て月も當れぬ
分野なり。石見怒て刺人とすれども玉琴さらに刃を放ぜ忽地
刀尖二寸許嚙折られば石見終に玉琴が首をうち落し手下の
小賊海道二夜叉五郎を呼ぶいつかく。吾廿年来十万ぜ居を卜



十たび名を更といへども、はずかゝる奇妻にあはず。永くこの
地に止るべからずとて、二賊に命じ、玉琴が屍を楊斎下に
埋させ、人を井に入て鏡を捜索させけれども、水深して其潛
ざれば、所為なく、餓須に家財をとり収、その夜いづちともなく出
去けり。呼、玉琴身をもて良人の疑惑を救ひ、遂に仇家に
陥て、仇人の手に死す。是此申包胥が天定て人に勝、人定て
天に勝といひしも、今玉琴が身のうへにや。田夫山妻も皆
あはれむ者は袂をぬらしけり。扨も倭文は五十金をもてかの
白毛獼猴を買とり、これを鎗家に授して業創をとゝのへ、さて
母これを服るに、不日して両眼あきらけく、七月の下旬に
至りて全く快かりければ、まづ馬籠に到て玉琴に告まゐら
せばやと、彼虔婆に到て客の姓氏をとへば、元来旅客のことなる
をもて、老婆も詳にしらず。一人ふたりは旅して倭文らが裝ひ。
玉琴已に岐阻に赴てより五七十日におよべども、一度の音耗も
絶ていらざれやと、ひとり躊躇て、又をぐらく家に止り、その音耗
をまつに、八月に及べどもえまたく一紙の雁書もきたらざれば、
今はひとまくらがたきかと、遂に啓行して岐阻におもむき、五
七日経て馬籠に到り。彼が見つとたづねども其処を
知るものもなく、あまりに哀かなて中途に日をくらしつ。漸飢有
のぞみしが、只見る山間に一軒の家あり。衡門半ぞ死て裡面
に燈の光見えければ、走入て門を叩くに、屋は大かれども
寂寞として人ありともみえざりし。内房にやあらんと庭

あるうちに紛て見れば月光四下にうちて前面に子舎あり。
彼處に人影こそ見ゆれとあるにしたがひて見れば玉琴白
團扇を採て出より前椽に立て。倭文十二分のうまつさに夢
うつゝともこれまでぞ。倭文こそ来たりといへば玉琴良人の声
を笑て。哥嬉よりぞ来りたるものなるといひつゝ走よりて送膝。
左右云もなくて数行の涙にむせびたり少選して倭文いへらく
你にうれてより彼某物をとるのへてこれを服しに文月下旬
に至りては眼疾已に平愈せり。よりてこのことを志らせまほしく
思へども。猶を別てのち黄太の音もなく所在も詳なら称ば所
為なく。志ばらく鄉書を俟しかどあまりにまち絶てたづ称来
しも。分鏡の契つれぞして今宵ちらばもめぐり會ての嬉さに

といふ。玉琴もまた涙をとゞえていへらく。ここにも疾音耗せまほし
くおもひしが。主人さらにおもしを許さずまづいふ。これはこの家の主人
こそ仇人石見太郎なれといふ。倭文おもしをゆるかも基麿主人を
石見なりとやといひつゝ刀を携て立ちて人とはる嚢とくしとあるに
それにて説話あれ渠今はあるにあらず。武義國新嶋村といふに
ありてをりくあらへ通ずるなり。今夕は家僕も紅坂に行て素人も
あらずは夜とともに給べしと伴ひて外房に入ぬ。倭文衰もやうにて仇
人の年紀相貌をとゞ問ば玉琴箇様ゝ如此ゝと備細告ぬ。
倭文欣然としていへらく。既に石見が形状をゆつ。亦その所在を知
今は少刻も躊躇ひべからず。明朝速に起行して新島に動くべしと。
ところにさらに勇めり。玉琴又告ぐ云。石見は常に十餘人の小賊

を志るべて儆備きびし。性急て悞志すゝ彼玄丘の鏡も渠が蒐めてるをえたり。遠からず郭が身にこそかへらめ。まらは頃こゝにありて身を穢さず疾にも絶ん玉緒の心をそくもなりへる。其いくその辛苦とるやひまふりといひつゝもうち濡へあり。倭文ふくその苦節を感激し。或は悲しく。或はまつこむ會稽鋭竭ぞ志く早晩燈の夜ふけたり唐李商隱夜半の作あり。いひ得て好。

五更三點萬家眠　露欲レ爲レ霜月墮レ烟
鬪鼠上レ堂蝙蝠出　玉琴時動倚レ窗絃

倭文は長途のつれにや。おもはず月睡なるが忽地涼風膚を犯せば驚き覺て左右をえるに夜はむなしく明て玉琴は傷まあらず。さはいつち行かんと起出て四面を視れば家はまだ新かれど人は

住るともいへえず席薦さへなくて氣糞散ぶれ篷にて蜘絲
簀縁し。室房にむとり叫ぶりしかば。只惆悵と呆えて。なほ疑ひつゝも
庭前に立出れば楊柳下の土をしてしるべきところに一張の短冊あり
て朝露に添濡たり。何ところなくとりてあれをえるに玉琴が身して
一首の和歌を志るせり。その歌に云。

雛の尾上に遠き燈の月さてや鏡の新なぐれらむ

倭文これを吟じて大に悲しくて云。玉琴玄丘の鏡をとり復人として
仇人の爲に教されしこと疑べからず。これにこの事を告んの爲也。魂候に
形をあらはし。なほその量を志らせんとて。さらに一首の歌をとゞ免する。
命鏡の緊宮し紀を歎嗚呼節なるかれ義なる勢と數行の感濡
禁ることあらはず。少選してせこころを張。笆の下に然りまし菊花

を手折て是の左右に挿し黒貯をとり出して彼短冊の背に。
妹山のいはほにおもるはれをかも志らずて妹が待つらあらん
とぞ書つける。是は拾遺集に載たる人丸の詠なりしを。河にとりて
かくしひよせらるゝなるべし。彩て短冊を樹下に傍らけく神版とし。尾
獸の落棒たるを拾ひて圓伽桶に掬水を汲んとて井欄の上に立
ちて瓶索を引に。姫べし晃ゝたる一面の明鏡木罌にかゝりて
上ゐり。驚てこれをとりあげ見れば背面に玄丘の両字あり。倭文
よろこぶに堪ず。袖をもて鏡を拭ひ。こゝろその面を照し亡語て云。
鏡と人と共に出鏡帰て人へらず。復嫦娥の軽なし。むかしく明
月の輝を留と陳の徳輝がらしもうべなり。これをもらくぬらぶ
ぶを听ぶ。これに鏡を得させん謎なり。吁出琴。身死してあれ

吾をたすけく。これ立地に石見を対て。その冤魂を慰むべしと
樹下にむかひて合掌し。賢妻の灵魂速に天界に生ぜよと少
刻睛をとぢて弾了。かの明鏡と短冊をとりて懐に挾猛然
としていつゝく。石見は是千鈞の仇なり。縦柴虎にして翼あり
とゝもよく逃るゝことを得んやと直に門外にもゝ望出東を望て
弛去れり。今この地を喚て妻籠といふと。後人りとゝて出琴が
来をとりて名ぼけたるか。又一説にこの地は治業類和年間。
木曾義仲属城の古迹に昔義仲雲をするところの猿馬大名山
の反桂橋より隨ゝ斃せしよりてこの地三里の間を埋馬と呼
けるを。後に倭文が妻あるとゝなるをもらく。紫田より西を埋
馬巓とし。東を籠妻巓と喚といふ。亦籠妻より数町東の

街道に磐あり。名磐と喚做。倭文このところに来ますこと有
その妻を哀悼し。少別磐の前に立て頻に縈繋せしより。
恋磐の名ありといふ夫陽人は車を告に語を訖し。陰鬼は
おもいに告に夢をもつてきて。その車忘湛にちかしと以ども。
この人にしたるこの毒車あり。亦何ぞ疑人詩あり證とせ。

月暗秋窗蕉葉横　破簾風透惹幽情
遠逢故客夢殘處　絃絶玉琴聞一聲

月氷奇縁巻之四畢

月氷奇縁巻之五目録

第九回

壯士听詩謝恩
孝子占夢復讐

第十回

陰陽和合熊谷坡
劍鏡奇遇馬籠巓

第五篇

武州　熊谷寺

撥戈飛錫徳無量二百年来選佛場可羨古坡黄葉樹石泉流出草花香

月水奇縁巻之五

東都　曲亭馬琴著編

第九回

壯士听詩謝恩
孝子占夢復讐

熊谷倭文は馬籠の山亭をイレ出足に信せて路を急ぎたれば。八月廿六日に民州深谷といふ孤村につれぬ。しかり新鴻村つれ籠原新堀を經て二里の行程を隔たれば。とかゝち深谷の客店に宿をもとめ。次の日新島に至りて習に石見太郎が所在をたゞ孫同と以へども。渠至ところ名を更形を変ずるをのゝく更に知るものなし。ましまより両三日高柳熊谷の辺を徘徊して仇人を探索にいまだ其の便を得ざ。倭文大に屋をうしなむ所為なく亦寒々と深谷の客

店に立ち掛けるが先に一個の行客まりて隣棚にあり。倭文は鉄門一重隔て一室に引籠。むとり燈火に對て歎息し。仇人の所在知ざるをうらみ旦至琴が枉死をあはれ一ミ心中鬱しと云ふ。遂に時を枕にして少刻目瞬ける夏中に人ありて告て云。你仇人の所在ありしなれ遠からずして病志を遂づ死ぞと告ると思へば驚き覺ぬ。倭文夏裡に示現を得て大によろこび。起ありてなかなかその事を判斷するに遠寺の童声かすかに少々時に隣棚の行客。声たかなかに詩を唫じて云

一個蒲團一個鍋　荒年不怕賊來多
山前財主三更夜　狗一轟時便打鑼

倭文これを少しおもへらく。この詩はこれ去歳上市の猟夫の家に憩とし。屋柱に題せし漫戯の詩なりしを吟ずるもの柳何人そやと疑ふ。窮に後隔の間より闕窺ば。年才二十四五の壯佼蒲團の上に夷踞せり。倭文ましをみたく忽地曉に市の老翁児二人もてりといひしがりしくてその前子ものにやとむとりこちて已に立出て詩を吟ずるの縁故を問諦んする時。外面より一人来るものあり。彼行客問ていはく。仇人の便宜は甚麼。彼人云大哥よろこび。ぬべ石見太郎が所在を志り得たり。渠明日箕田村の八幡山にあるべ。その路ところかぶむてましを熊谷坡に対づし。行客云。是もよしと云ふ。一人を欠ぬれば猥に手を下かたし。彼人これを少て沈吟して倭文二人の説話を少て大にあはれ。石見はこれつゝが為に千鈞の讐なり。渠に何人なれば石見を仇人といふ中と呟つ。猛然と

後隔をおきて二人が中間に坐していへらく。両位は貴客の中にあひそ小人もさらに宿かる旅客あり。今彼首ありて二隅は話を少べ石見をのぶく仇とし。柳石見はこゝ父及妻は仇人なり。二隅は又石見に何の寃かあれ彼二人声を齊して云石見は我們の為には古主の仇あり。貴客石見を仇とし。あゝは永原家の郎君にはあらずや。倭文いへらく。さかなら左近が兒にしる熊谷倭文と名告るものなり。二人これを少よりたちにて席を謙す頓首していへらく。僕は先君の家吏上市丹治が頑児にして兄を丹荒といひ弟を丹平といふ。愚父丹治往昔江州にありし時。山雞の恩をもて家公の命にたがひ。その夜逃奔して故郷上市村にかへりて獨戸を業とす。そのち江州の風声をきくに。家公は賊の為に死さるといふ。

継室初君四分八落に離散しなひ。家兄喜内も白河の山中に於て山客に教ましとうけなり。老父大に驚れ。當に舊恩を報ずれはこの時なりと。直に大和を啓行し。幼君の所在をたゞ尋ねんとせしにそこだも風濕を患てその下とうかなど。遂に蹙となりて徒に光陰をおくれり。こゝが兄弟をかく母におくれ艱難の中に人となり。老父常に兄弟に教て云ふ。久しく蹙となりて古主に仕ことあらなど。汝はその所在をたゞ尋ねらせ。これにかなりて忠鰊を竭さゞしといへり。しかるに去る六月六田は度婆来りて家祖を買んといふ。僕銭まで五十金を得べ。これを賣づしといひしが。両三日を経て彼老婆金を携来り。猴を買ひて去。老父その金銭納たる搭膊をひらくあらしていへらく。この裂は古里國の西洋布

にして。往昔南蠻山雞を獻し給ひ。これをめく筴の裘裝とす。
是世に稀なるものなり。この裘を蒐る人おそらく古主の郎君なり
らんあらぐ所とされ。かち老婆に猴を買人の年庚相貌を問ば。
老婆備細古主を說ひて於て老父いふく發る所。その夜僕ホ不
話て云。六田此退糧人ハ古主の郎君なるべし。これ熟考るに舊
年一個の行客兩個の婦人を携まさしかり家に餌ひ六田に知
已ありといひしが見し。おもひ悞なることありて。中夜その人とを走せ給。
今日虔婆が說ところ。形容その人と相肖たり。汝ホ明日六田に至
その人いふく郎君に推ひ。この金を返錦し。兄弟共に仕へて
先君の仇を復べしと命ず。僕ホ古主を笑て。そしらへておとろ給。
明日六田に至んとするその夜。老父頭に庭にて湯茶口に入らず。

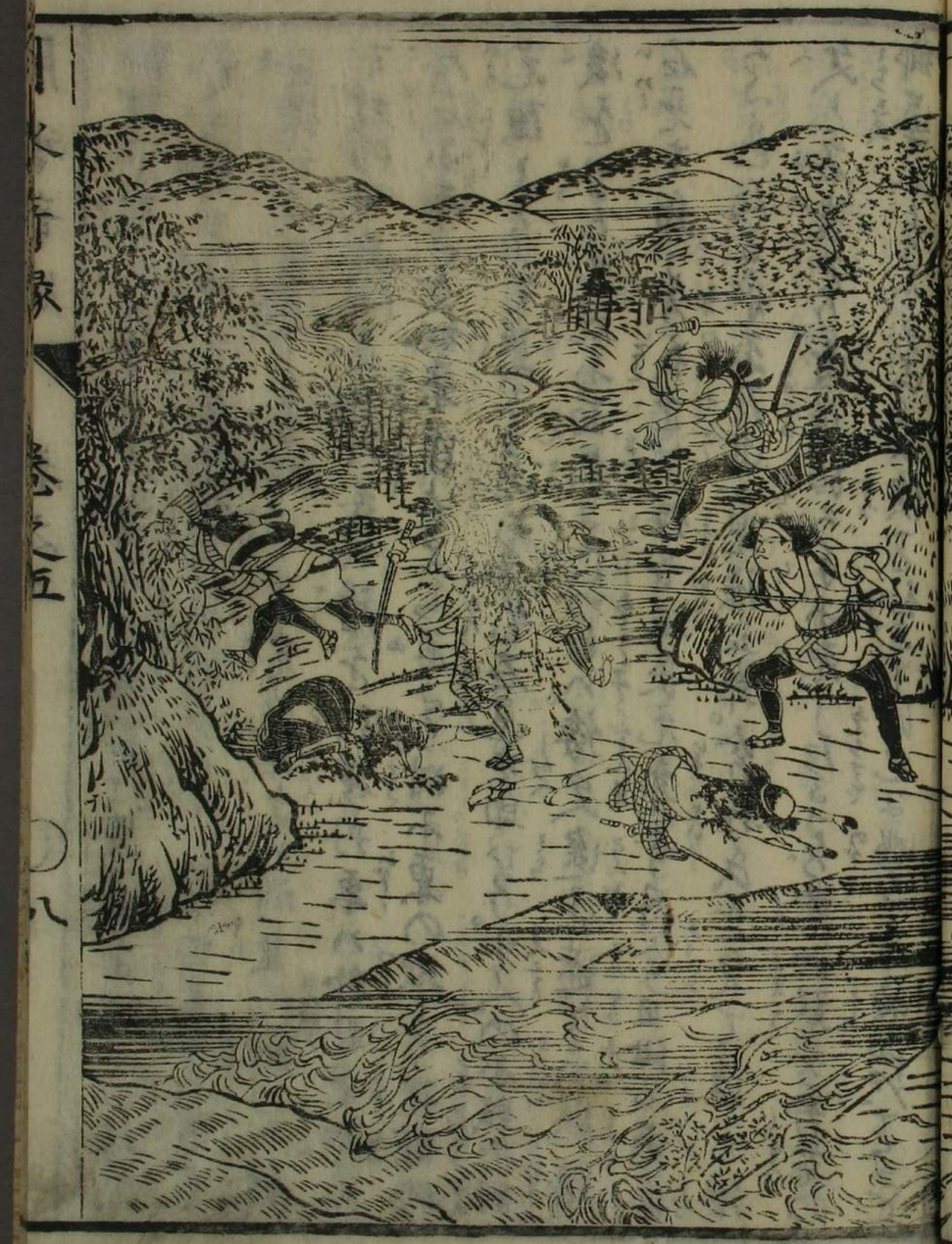
廿日許にして身はかりぬ兄弟哀悼に堪ず大斂ことをとりのち六
田に至給て君を訪ば。隣人をしへて昨信濃へ行とて起程し
ありといふ僕ホその不遇をとりて。直に蹄を慕て信州に至
ところに岐岨の馬籠にして途に一個の女兒にあふかの女兒
いへらく。二公古主に遇んとならば其所に民州深谷に行べし。
且古主の仇人を石見右郎といふ渠今彰岡村にあり。そぐ彼
處にいたらば石見が所在をまぐらよ。仇人の便宜を得るの日。
かならず古主に會べしと教ゆ。僕ホ本年につゝ始まりぬ。その
名を問んとするに忽地その形を見ず。さらに於て神明此郷
導志ゆふことを曉て。昨夕古の地にありてそぐ弟丹平を彰嶋
村に行て僧に石見が所在を探索させ。僕ハ即つゝ郎君を

まづ孫なる。志りしども君が腕を見志らねば。去年程に題し
ぬひし詩を吟じて。暗に手がつもとせしに。夕果して仇人の所
在を志り。又幸に郎君に遇なる。是ぞ神の衛護にふる
ふるべしと。兄弟備細に説了て丹荒皮腰帯より圓金五十塊
とり出して。志しを倭文に返しけり。倭文情由を少々長嘆し
中途兄弟を導たることのハ乞妻玉琴が幽魂なるべしといひて
和平祖女が吉野川に投しと及玉琴が幽魂に會て玄丘の
鏡を得たりしと一五一十説話ハ丹荒丹平或ハ怒或ハ猿泥
なるいひつゝく。祖娘ゝ数年六田に居ゆひしを老父阪尺の間可
在なりしを志らず。是慶ゝく家にのゝ篭居し故なりと歎に
これを後悔して倭文嚴然として云我聞玉性ハ金を碎とされ你

の家れ猕猴を得て疑疾立地に愈たり。豈五十金を惜んや
只ころよく納ると嫌ることを金をかへしけれども兄弟ここにこれを
受ずしていひつゝく。僕ハいまだ寸功なし。いかにぞ貴祿にあづからん。
もし強てかへしぬれどこのところより辭去べしといへば。倭文爲何
なくこれを収てく云若曹ハ實に天下の義夫なり。志ばらくそ
の意に志るがふべし。他日もれもし志を得バ十倍してこれを報ん。
夫易に云二人心を同ぜれバその利金を斷とこれを二人ところを
同して事をなせバ利順なるべしといふことなく。石の堅をもよく
破金の堅をもよく斷をいふ。もれ今左右れ翼を得たりこれ
まつらく丹治が誠忠によることなりと厚兄弟を賞しけるが
その夜主従仇人を討つ謀を定め。明日早天に丹平を

新島村に到て仇人の信を聞定させ。今夜熊谷坡に来る
よしを討べしと已にその準備をなしぬ。この日はやく裏布を
買て衣を裁縫させ。丹蔵兄弟は猟戸を業として常に竹
鎗をつかひ得たりしかば。潜に市中に出て鏢鎗を買来り。竭
手に取りて修文は丹義を将て客店を立出。既に熊谷に
来るころ。早黄昏に程ちかけり。客店の男女その由を告るぞ。
この光景を見て大に奇しめり。御武蔵国熊谷坡は東西四里の
曠野にして田畝南北に連り盧落五十に隔てり。引樹旅客を
息むる石清馬蹄を浸せど。さりとも夜は人跡をたちて行李
も過るところなし。かくて修文は丹義ともに吹上村の樹下に
坐をしめ。待程に日已に暮れて東西をわかち

たそ時に丹平蕉火をともしたり。やゝ程もなく。仇人
今箕田をたちて家にかへる準備厳にして十人の小賊
をしたがへたり。そのうち白髪長髯にして面色赤く皂衣服
を被たるものこそ石見守郎なり。衆賊は僕兄弟これを
討べし。郎君はたゞ石見を遁さずめて走せあつかはれ
といふ。修文雀躍してよろこび。往昔正長元年八月晦日。わが
父石見がためにうたれ給ひしより。今享徳二年に至りて茲に二十
六年。今日は是先考の忌月忌日なり。この日宿志を遂る
こと皇天の感應あるに似たり。特にこの地は熊谷直実の古
里なりける坡を熊谷と喚做すが姓も又熊谷正に仇を
討つ祥瑞にこそあれ。とて共に準備せよと坡の草に火を



かけて篝火とし。三人身にて暴布の單衣を被て一條の交結帯を後。手足に袖套裩襠を穿て紅帕首を盤る。主従已に装束しらず暗令を定め。倭文は羽隹の劔を採て坡の中央に立ば。丹義は鎗を引提丹平は朴刀を扣て左右に志るが云。来遅とまち居る。附に東の坡より提燈の光隠々として来るものあり。是石見右郎なり。十人の小賊に前後をなりて既に面前に近づけば。倭文途を遮て云。賊魁石見右郎にが云を笑。往昔正長元年今月今日汝が為に うるをたる永原左近が児源五郎。今姓氏を更て熊谷倭文と名告なり。近曽汝が手に死したるこが妻玉琴が苦節の郷導によりてまちに候を云さし。汝已に逃るに路なし。とをもとしらば速に務負せよといふ石見その多勢なるさるを侮て冷笑て云。黄口孺子ことをのらく仇とするは蟷螂の鉄車にむかむ。箕の虫は火にあらぶなり。既に足利将軍といへども是れを征するをあらずや。汝身の分限をしらず。乗りて虎髯をむかんとす。あれ首を刎よと下知すれば。石見が傍にありける海道二腰刀を抜て切てかゝるを。丹義鎗をのらく迓たるかに衆賊ありをとりて三人をとり囲洩さゞと挑戦ば丹平右に當左に拄直に小賊三人を砍伏たり。倭文は石見と戦を十餘合にしてひまぶ務負を挟せずこの時篝火既に滅て四面暗夜となりければ。衆皆刀の内をまつしゝ徒に空を切賊徒交撃して傷をのむかりける附に坡の両辺に数百の松明俄頃に爆と連本。人東西に徘徊して暗に夜

戦をたまくるに似たり。丹義は火の光につれてふたゝび海道二と戦ひ遂に鎗をとり伸て海道二を刺さろとところに夜又五郎走り来て丹義をさらんとれ丹義忙しく迎戦んとして悟て坡を踏そびし。水田の中に轉墜夜又五郎さきを見て坡を飛下丹義を砍んとするとれ丹平たまけ来て夜又五郎を只一刀に砍ころし。鎗は竿を拿てまゝに引は丹義鎗に携て水田より立出るに。全身漬淖となりて恰田荒は漕渠を渉に似たり。さらにおれたる丹義倭文がことを同じ丹平いふくく。嚮に火の滅たるとれ郎君を見うしまり丹義大に驚れて如まさび坡に上す兄弟西を尋ぬ。そせ西れ分り。行て倭文は行樹下にありて石見とたゝふ五十体合時に倭文恨て路上の石に跌たちまち撲地と仆れば。石見走り刀を揚て切んとするを倭文叩あがらその足を切たらんは。石見刀にきたがむる端と跌を倭文身を辷るがべして起あり。肩尖よりも膽をかけ切て両腕とあれ。石見は常に鍵縁衣を被る敵を防ぐの準備とせしが。今倭文が一刀に両腕とあるを羽隼の宝剣にあらをいかでその堅を破づれ。倭文をあつち石見が首をとりて立ありれば。丹義兄弟中井のかたよりそしまを来ず。この光景を見てたふよろこぶ。主従逸にその悪あれを視しけり。この時小賊にてぐ〳〵対まてゝあらに敵するものありければ。倭文仇人の袖を断離てその首を裹て遂に三人西を望ゝる走去けり。

第十回

陰陽和合熊谷坡
剣鏡奇遇馬籠巓

漸く倭文ハ丹義丹平らとも尓路をゆくこと三里餘已に熊谷寺
の邊に到る比ろ夜ハ尚二更の左側にて。一軒の酒楼店上に一個
の方燈を挂て清茶貧食の文字を記し。又別に両個の招牌を掲
たしたる聯句を録したり倭文首を回して是を視れば

有レ酒如レ線遇レ斟則見
有レ餅如レ月遇レ食則缺

とぞ書たりける是ハこれ揚大年と丁公の聯句なり倭文これ
を讀て。この店酒を賣餅を鬻ぐとしりけれバ三人身を縛して
裡面にはしり入れバ固宅の男女倭文らが衣服の血に染たるにおどろ
き怕れ衆皆外面に逃去けり。丹義これを見て呵々と笑ひ汝ら驚
き倫の貌なるにおそれ賤なりとおもひつらん島君も定めて飢ゑ

そめ。丹平酒をのち来れ。しいそくえんびろ地焼に柴を打焚けり
濡たる衣服を乾せて。丹平酒を煖て倭文にすゝめ兄弟も又飽
まで嗜て倭文ハもとの性酒を嗜ざりけれバ。衣を更んとて内房に
行てみるに前面に庭あり。蕉葉破れて紙窓寒く簷蛩集て沙
庭なるし。時に疎林の中より坐禅をするる書に鐘の声きこゆ。倭文
おもへらく前面の蘭若ハ熊谷寺なるべし往昔文治年間熊谷直
実久下直方と封疆論して浮世を観じ。名利を脱離して身を
釋門に投じ。終にこの寺を創むとぞや。或ひハ蓮生ハ宇津宮
郎入道なりとの説あれども寺説によれバ蓮生ハ直実なるらんかと
元諸ハ。懐古の閑情もよほしければ庭上を徘徊しおもはず数十歩
ゆくゆくかれこの所熊谷寺の墓門に通ぜ。紀墓丘をつくる夥

折を埋え。石麟石を累ゝく驂鸞を成る。さらに終て頻に父母
玉琴がてきとおもひたる千行の御禁ぎるとあるのぞ。さるかち石
佛を拊していつゝく。父母されを生といへども孝をうへ死の日なく。
玉琴されと苦辛を共にして飲乐を共にせずと。夫死亡は老少を
論ぜるとあるのぞ。縦千年殘門の限ありとも。終に一個の土饅頭と
なるてこそれ新のごとしと身をかこちて有望罕なるが。豹脚蚊志
さらに身を刺されば。忽地さらつ死く立かゝんとする時。隠くとし
て白光目に遮る。あややと熟視ば。一個の女子皜素夾股を被て
飄こと来るなりけり。只烏暗して何人なるとを志ぞ近くなる
ことにおもひぞて交面されば是乞妻玉琴なり。倭文哀悼に堪ぞ。
まゝにおもひぞて下土にてうつぞなれ火宅に迷ふるされ今夕

石見を郎を対て宿志を遂ふり。今は怨もあらじ。只速に天界
に生じ来とゆひつゝも口中頻に仏名を唱ふ玉琴は良人の声を
ゆゝりも身を石塔に伴ひ只管縁よりたゞければ。倭文いふ悲る
遂に一巻の提婆品を間續して少選して玉琴いつゝく。郎に別
しより前面なる酒僂に来ゝ家妓となり。酒客は席に傭れて
憂をつゞなる生計も。まゝ身はてはいとふに足ず。只郎が来おば
つかなく遂にそうぞ病にそなぬ。この精舎は蓮生法師基を冥記
し霊場と此は病苦を忍て夜ゝ仏に乗し。苑をさゝげ香を進。
郎が猛疾平愈して宿志を遂ぬんことを行なりし結願の々夕
にあたり。郎は眼病疾愈る凡人を対ぬひ。そうしてもめぐり會し
嬉さよさるをまゝはをめゝく下里人としぬ。郎がおろに秋ふち

こゝ身を脱蟬の客氣にやといとうらみて笑ひ。倭文さらに曉得ぞ
していへらく。まゝ岐岨の馬籠にして抵目你の幽魂と話を接し。
玄丘の鏡を拾得て仇人の所在をしる。記念の短冊さらにあり。且ところ
僕丹義丹平といふその你の鄉導を得てこれに會せ豈世間二
人の玉琴あらんかしその幽魂にあらざれば狐狸の魅をなるべ
しと逆に疑ひを抱て決せるとあるべきぞ玉琴さらにを笑ておもひ
なぞ衣襟に生冷氣していへらく。ここは六月六日より轎子に乘て
かく中途爰ともこゝろを一個の差慕來ましく云。泄馬籠にまゐらは
脛命危しまゐてともに來ましといふく轎子より出しまを携て
行といへばこの地に來まり。いまぞ嘗馬籠にまゐしとかしといふ。
倭文まゐてくさらに疑ひさらに來を論ずるの地にあらざ。これとても

に來るべしと夫妻酒樓に立かへるこの淑丹義丹平は子洞洒張
飲て居たりしが少刻倭文が見えざるをあやしけるところに倭文は
玉琴を將てかへり來りしくいふ前事を説据は兄弟されを笑て
半絃半疑し。さらに是非を疑ざるとあるべきぞ。倭文疑ひ解れぬ
慌しく懷包紙をひらけ馬籠にかく得たりし短冊をみるに。さらに
ぬれし紙白帋にしるしたるかゝ書し妹山の家の背面に尚存されば。
さらに至らくそゞ免ちく曉てしらくさらに夫妻危難にあふと數回
ありと如ぞ。こゝに事にしてあり免たり。既に今宵仇人を討の淑闇
夜たりを得ざりしに四下に鬼火ありてさまを祐く。是全く
神明のこれを祐ゆふるべしとしれば衆皆皇天の恵數あることを
感激せり。この時酒家の主人はおとり家にのこり止り。厨下にかへれ

居たりしが。四人の説話を聞て。鈍くと這出でゝ云ふ。小人はこ
の主人なり。却も去六月一個の老翁この婦人を将て来たり云。
この女児琴道を答せ。志ばらく汝が家にとどめよ。八月晦日に至
らはその夫さらに過ぐん。その附夫に久しくとゞまつしといふ。又是ぞ小人
それぞ恠おりふといへども為何なく。さまつち家に留む。今又果て
その云れ如しと語る。その事符合せるをもて倭文をもて神の
祐を感佩しらるゝ。これは極秋憲忠の家士熊谷
倭文といふものなり。今夜熊谷坡に於て兄の仇石見先郎を討
てり。この石見は賊魁にして官にも探索ありと。他日知源に
がことを問ば姓名を通ぜべし。荊妻志ばらく你が艱育にあふ。
是又一奇縁なり。吾们これより江州におもむけぞ。今夜はさる

病ぜべし。是聊荊婦が病中の経用を謝するなりと圓金二
十塊とり出して与ければ主人大によろこび。家族をよびまて
俄に酒食を設萬方四人を饗けり。暁天に及て倭文夫妻少
刻目眩るに一個の美人頭に妙常冠を戴れ身に欠穀の
華袿を被て。蛾眉人を移し蓮歩馥郁として夫妻の枕上
にたち。鶯音をもらしていへらく。これは是志賀山中に千年を
経る白狐なり。往時正長元年にが二千五百の眷屬に上和平
にたすけらる。これを一ぞ澤枯の恩を謝せんとしたれども。いかにせ
ん和平は隠慝の奸賊にして福を降がたし。さてをもてこれ暗
に你にが衛護神となりてその危難を救ふこと数回嚮に老翁
と変じて玉琴をこの地に送ればこれ又縦に

玉琴とあり。石見が爲に殺したりと見せて彼を遁す。又
その接魂と変じて你に明鏡を授て仇人の所在を告しませ。
或は丹籠丹平が御導とあり。あるひは暗夜に火を牽て雛云
を討のたまけとせり。倭文爰裡に向ていふらく。白狐ほが夫妻
を両めりて危難を救ゆるを感ずるに堪へり。只ちこがふ玄丘
の鏡はその徳妖魔を鎖鎖せ。しかるに明鏡宝劔に觸るく
といへどもその本身をあらはざるをは是麼白狐云愚却凡劍
鏡を怕るゝものは鬼魅野狐の屬なり。これ千餘年を経る
己に神通を得たり。何ぞや明鏡を怕づれ。往古金華神劍と
鏡をおそれず。その事家人小説にもいへり。或は捜神紀に載る
ところ此千年の老狐。張茂先に戯れ。或は太平廣記に説と

ころの老狸董仲舒を試などさしたらはえる人間に禍する
妖精なりといへどもなほ劍鏡を懼ず聞ずや本朝一條帝の
在位。霊狐宗近をたすけて雄劔を作て遂に三條切雅治
の号をとゞむ。なほ疑はゞ馬籠の山亭に来りて楊柳下を
見よといふく忽地金光をもなち西をさしてぞ飛去ける。
さしも南柯の一夢なり。夫妻覚ちくのち丹籠兄弟に説話ぞ。
二人ふかく霊狐の神通を嘆美せり。この時既に夜向明とも
ならば。四人遂に酒家をくちて出路をいそぐ事数日。九月九日
馬籠の山亭をるりて楊柳下を見れば。鶯に倭文が挿る
ましし菊おのづから根を生じ。数莖の蘭菊爛熳と咲そぐ也。
樹下に一ツの穴ありけるか。白狐たちまち穴口にあらはれ出再

三倭文おをかりえつ。ふたゝび完に匿てつゝえど。衆皆これを
みたゝ感涙をとゞめかねしかゝ樹下に額弾て灵狐の
宿徳を謝し。遂に山亭を出去る。後人霊狐を讃する
句あり。要を摘ゝるさらに紀して

完居知雨　狗斉若神
謝人疵疾　稱着近仁

今妻籠の東野頭兜観音の間に和合といふ村あり。倭文
この地にして疑心を散じ。夫妻ふたゝび和合せしより名く
といふ又和合に酒店ありて英酒を醸し。その名高し。是
玉琴一旦酒家に身をよせるの波なりといへり。新て倭文
夫妻は九月十三日江州志賀に至り。考妣の墓をたづぬる

に志賀の外城に山あり山の半腹に三基の墳墓あり一は先妣唐衣
の墓。一は侍児漣漪の墓なり。先考左近が墓はその中央にありて
圓月大阿居士の六字を刻し。星霜既に二十餘年を経て石は
稜々として野草に埋ゝ墓誌泯滅して蕃苔生ず倭文ぞ思ふ
石見が首級を墓前に供じ。再拝していへらく。ふ月の男怨敵石
見太郎を討て首夷を慰しまるさむ祢がゝは憤を解寃を散
じて天界に生じ給へと拝すは玉琴丹花兄弟も共に墳墓に
謁して。さらに能く懐古の哀情をきりにして少刻涙にむせびけり。
そのうち倭文墓の左辺をみるに碑ありて偈を携つけたり。石面
青苔生じて僅に正長元年九月某日拈華老師造立の数個字
ゝ。倭文苔を払ひ文字を拶ひまくその偈を讀に。

鉄鯉辞レ湖　金烱没レ地　奇鳥雙飛
霊獣走レ隧　不レ夫不レ児　鳥レ讐鳥レ魅
解二脱二凶一　二物自至　菊逢二重陽一
丹丹是華　須見因縁　件件存字

倭文讀了歎じて云。指華老師道高博識二十六年前已に未来を説めり。鉄鯉湖を辞と云ハ鉄鯉ハ晋の王丈が古事。宝剣の異名是宝剣家をさるなり。金烱地に没と云ハ金烱ハ鏡の異名宝鏡石見に偸去ることをいふ。奇鳥双飛と云ハ山雞の死るを悲し霊獣隧を走と云ハ白狐の難を救ふを説。夫ならず児ならずとハ和平祖女及ひこれが夫妻のことなり。讐となり魅となるといふも。仮父和平ハ却てこれが父の讐玉琴ハ死せずしてかへりて魅となることをいふ。

二凶を解脱して二物あつまるとハ和平自刄し。石見首を授く。鏡と剣とふたゝび合ことを垂示せし。菊ハ重陽に逢て丹丹これ華と云これ後に馬籠を過りしハ九月九日にして丹義丹平が奇遇を説めなり。おのおのにこれこの字を羽隹と号く。羽隹ハさなからち翟なり。又鏡を玄丘と喚ぶ。宣室志に狐一名ハ玄丘校尉とありなちらこ玄丘ハ狐なり老師剣と鏡と狐と翟の四種にこれらがその生涯の吉凶禍福を論じたるなりと仔細に偈のこゝろを説きゝかせ衆皆因果の免れがたきを暁て老師の権智を量の方便を嗔美せり。この時彼の高貴朝臣ハ寿算既に八旬におよびしが志賀の居城に居をひかれしが倭文曽て登て石見太郎を討しときをおもひおこしびて宜しく石見ハ賊魁にしてこれなれ

天下の罪人なり。其年く角首をべしと民夫に命じて大津の
申明亭にかけさせらるこの日高負倭文を召て宣し。你が父厄
近いまだ氏族たり。你今なりされに仕よ。倭文謹ていはく。臣いと
けなれより植杖憲忠に仕て主恩ふかし。讐を復のうち一まぶゆり
仕んと約せり。ちをめくる命に惠がたし。後年の児を率ば君が
馬前の率となして舊恩を謝し。有るべしと言ければ高負その
義に使を感じて留めたまでちまに金帛を賜てその純孝を賞
ゑへ倭文恩惠を拜謝し。遂に玉琴丹に於兄弟を於て鎌倉
にかへりる。時に管領成氏質弱多病にありて總州古河に隠居
し。植杖式部少輔房顕及植杖治部大輔持朝に管領をすべ
ゆふ。ちまを扇谷山内の二家と号し。関東の両官領と称して。

倭文は鎌倉にかへりて憲忠の後室に拜謁し。ぬきむ房顕に
仕ければ房顕その誠忠至孝を賞して老臣の列に加ゆふ。
ちに於て倭文極楽寺に父母及和平祖女が墳墓を築れ。
又第宅中に靈狐の叢祠を造て春秋二季にちまを祀る。
今江戸金龍山に熊谷稲荷と称する神社あり。亦淺草本
法寺（号長竜山ヨリ蓮宗）にも同名の神社あり。後人のしてこの白狐を
祀めの秋そのうち玉琴三男二女を生り。倭文誓約にしたへ
ず。家子を佐々木家の臣となし。永原左近と名告。この人後
年ちまありて室町家の寵遇を得取用せられて越前外に
任じ。江州野洲郡永原の城に居住して。ちをめて永原熊谷の
両家振ことして富貴を係嗣につゝ四海を率にして五穀

豊登萬民泰平をたのしまけるとかん。待あり燈とす。

誠忠賠濁世　巨孝奉家艱

鋭志雪寃日　史生記莫刪

蓑笠隠居。硯に呵し。案を拊し。譯して云盗跖孔子に戯る。

王莽周公に比す。邪智の鬼神に迫り。梟雄此世に横行する。君子

大人なほこれと爭をあるべき。夫隠慝禍媒の冨一旦身を利する

といへども。天綱終にめらすことなし。左近ハ元忠良の士悦て一牌

を教す。その餘殃ならざ速石見ハ是殘匿の賊財を偷ミ人を

害す。天誅めれども遅し。嗚乎さまを是とせんや。彼を非と

せんや。天の人を罰する時ありてかならずめらすことなし。冊を

ひらくに童蒙こぶから勧懲とせよ。白居易讀史此作あり

かさねて燈とす。

周公恐懼流言日　王莽謙恭下士時

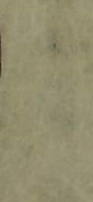
若使當年身便死　至今真僞有誰知

月氷奇縁巻之五畢

傳曰怨耦曰仇嘉耦曰耦未曰有奇耦奇
耦所謂奇縁也友人馬琴翁所述月氷奇
縁其言愈奇而愈高文章巧猶當其時觸
其事爛錦心燦繡口鮮葩競發秀蕚怒生
自古恍惚恠異之事何所不有齊諧之言
不可誣也月氷者取諸月下翁暨氷人復
撮合瑤劍之光及菱花之明以辯妖狐山
鷄之事說人所疑惑陳奇縁所繇生要皆
感激之所致而醒蒙昧之耳目欲使觀者
津津焉感興也夫惡棍逞姦種種謀事情

子不意中陷險艱萬苦千辛豈非花時之
風雨乎可惡甚者也琴翁所以作此編其
言則足利公制宇内拡權勢其時有覬覦
之臣群邪之盜誣誠忠賊貞操當時不諱
以傳之癸亥春某叟來茶談及之云遂耳
熟不日作之琴翁自髫歳即著神彩之稱
於四方駸駸耐菴施氏之遺響矣余因叙
所以爲月氷奇縁庶幾俗士愚婦著意以
觀之則爲勸懲之一助云爾

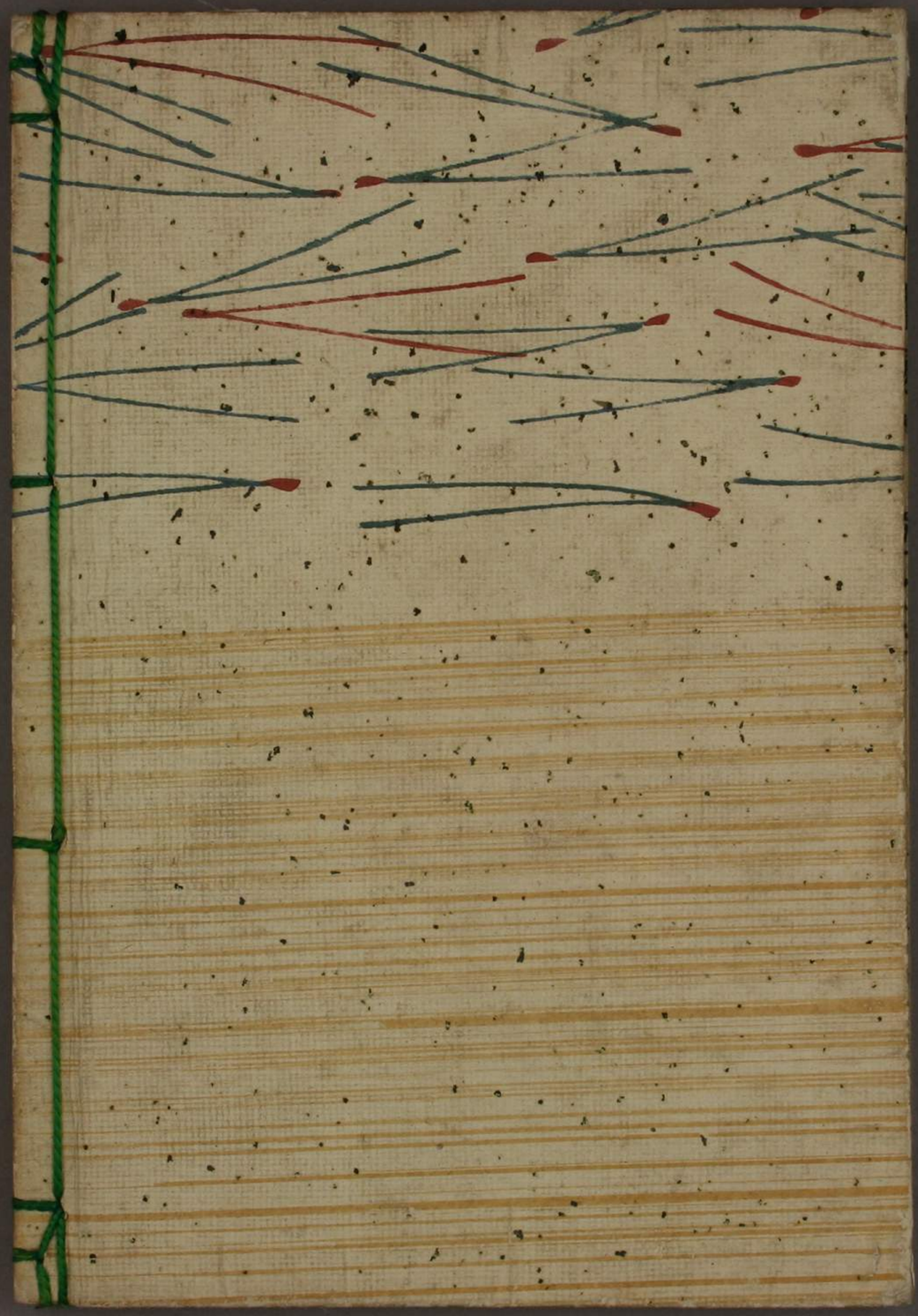
江戸　東秋颿譔



曲亭先生姓瀧澤名解字瑣吉一號蓍作堂戯號馬琴家于東都飯顆山前交友呼爲蓑笠隱居蓋先生每屬文托諧警悟稚蒙雖不坐作聲價世人飲香名尚矣真滑稽之雄也小人得其所述月氷奇縁五卷以雕刊凡四方賜顧君子認印號爲記冀不至悞

浪華書肆　文金堂森本太助欽白

蓑笠雨談

著作堂馬琴子著　近刻

全部五卷　奇談繪入國字よくよむ